

## 入試の季節に思う

浅海重夫

またしても共通一次にはじまる大学入試の季節となり、受験生とその親たちの苦難の日々がつづいている。二次試験の併願制も新たに発足し、戸惑いと不安の上に親のふところは—そう厳しくなるばかりであろう。わが家の子たちはもはや無縁になったとしても、わが国の教育界の歪んだ一面に心痛むばかりである。卒業年次10回生前後のご家庭がいまこの渦中にあるのではないかと思う。

高校授業の正常化と受験生の負担軽減が共通一次の趣旨であったのに、水準以上の到達度だけを見る資格試験ではなく、1点を競い合わせる競争試験になってしまった。受験科目数を減らしても、競争試験である以上それなりの準備の勉強に迫られることに変わりない。進学塾とその教師たちだけがわが世の春を謳歌している。今日日本の青年の同世代の40%が大学を志望するという。そのほとんどが一度は東大受験を考えるとみられる。そこで望みの大学に入学できなかった人たちのいづくコンプレックスは、受験準備に費した実り少ない労力以上に、後々まで問題を投げかけることになる。

共通一次に限って云えば、制度の趣旨と運用の実態との間のズレが問題となるのだが、入試が点数のみで合否判定をする方法に據る限り、やがて進学塾で調教されたテスト通過用技能者ばかりが大学生となる時代がくるかも知れない。同時に親の資力の一定レベルで事実上の足きりが行われてしまう結果も起こりかねない。

少なくとも共通一次の出題と採点の方法にはもっと工夫が必要であろう。複数の正解があったり、正解無しという設問もよいのではないか。1つの正解だけが存在し、正解への道程は不問にされる出題形式、あてうまや明らかな嘘を交えた選択肢を並べるなど、採点の便宜上の必要性が優先する。テレビのクイズ番組にあやかった設問が多くなったのを苦々しく思う人がいる。テレビ番組と云えば、近頃有名タレントが率先して、自分の答えが正解となると真先に手を叩いて喜ぶという、かつての道徳観では考えられなかった風潮が蔓延しつつある。傾向と対策以外の思考力は問われず、設定された答えに合致すればよいという画一的な同じ価値

観の人間ばかりがふえる世づくりに、入試もその一端を担っているように見える。

数年前に当時の文部大臣が入試方法について語ったことがある。共通一次は高校学習内容だけで解けるよう保証を与えること、二次入試では各大学学部が多面的な出題を用意すべきこと、また東大は大学院大学にするのが理想だが実現は難かしいかも……。しかしこの文相の考えも所詮は個人的意見にすぎず、その後このような趣旨が生かされる方向に進んでいるとは必ずしも思えない。かつて共通一次の出題委員をつとめた時の私の経験でも、出題形式の改革を委員会として議論することを発議したことがあるが、1教科だけが改定を考えたり方法を案出しても、大学入試センターの幹部やほかの多数委員の合意を得るために何の力にもならないことを知った。

中高生をもつ世の親たちの多くは、恐らく今日の大学入試について批判しつつもやむなく子女を塾に通わせ、心ならずも受験勉強を強いているのであろう。そのうちに批判の目さえ失って社会の大勢に易々と従うようになるとしたら、もっと恐ろしいことだ。戦時中に配給食糧だけを食って、ヤミ買いを拒否して一家を飢え死にさせた清貧で頑固な父親の話があったが、学校の勉強だけでよしとし特別な受験対策をやらせずに孤高をわが子に強いた家庭で、志望ランクを下げている二・三流大学に入った者もいるはずだ。しかし後口その人は親を恨んでいるかも知れない。

最近アメリカで行われた各国教育水準の比較調査で、日本の中高生の学力が大へんすぐれており、とくに数学のレベルは最高だといわれたらしい。ただし日本の大学生の勉強ぶりは劣っているとされた。この前半のくだりは日本の教育水準の高さを評価するものというが、何とのはずれな批評であろうか。第一算数のテストに高点をとれるのが数学の水準評価になってしまうとは驚き入る。大学教育に関してはかつてのライシャワー氏の評がさらに痛烈である。何故日本の大学生の多くが大学に入学すると勉強しないのか。その根源は見抜かれているだろうか。日本で大学に入ることは卒業できること、かつ就職さえ可能だと保証を得たようなものだからだ。人生のすべては大学入学できまる

からその入学のために一生に一度の努力をすることになる。日本と欧米の教育界の最大のちがいがそこにある。わかっているけれど改革はできない。大学人の1人として心痛む。

## 初島にタッチする

式 正 英

初島は気になる島である。東海道線の真鶴から熱海、さらに伊東線に乗り継げばその先の伊東あたりまで、車窓から眺める海上に平坦な島が浮かんでいて、先づ消えることがない。「一度は涉ってみたい」と思いながら、10km巾の一衣帯水は何時でも叶えられると高を括って果さぬまゝ何10年も打過ぎてしまった。やっと昨年の3月末、熱海まで行った序いでに初島航路の船に急に思いたって乗る気になった。パイオニア号と名付けられた小汽船で35分ほどかゝって到着する。しかし上陸して間もなく雨が降り出し、海上は時化の様相を示し始めた。波が荒くなると欠航という事態も起きよう。出来心で渡島したまゝ帰れなくなつては厄介なことになる。そうした判断で僅か2時間ほどの在島で島を離れた。

いくら面積が0.44平方km、周囲4kmほどの小島でも2時間では何を語る資格もない訳だが、やはりその場所に触れることは、遠くから眺めるだけよりも遥かに意義深い。港から舗装された歩道なりに海沿いの大礫の浜を東に歩くと、観光施設の「初島バケーションランド」にそのまま入られる仕組みになっている。島全体が火山岩から成る海岸段丘だが、その上段の東の一角を占め燈台の根元まで、芝生をベースにヤシ、ソテツ、シュロなどを配置した亜熱帯植物園がしつらえられ、散策し易いように出来ている。しかしそこまで行って雲行きの怪しいことから港の方へとって返すことにした。港のまわりの下段の段丘面は唯一の集落が立地する場所だが、その近くの路沿いに、往きには気付かなかつたが、小さな食堂がいくつか並んでいた。いずれも島の人の経営するもので観光客相手に刺身や天ぷらやアワビを御数に簡単な食事を用意する程度の店である。

その内の一軒に入り雨を避けがてら昼食をとることにした。そこの窓ガラスに貼ってあった空中写真をたねに島のもろもろのことを経営者のおばさん相手に訊ねてみることにした。するとそれまでにあった断片的知識が呼びさまされて、初島の特色に改めて興味深

い感じを抱くようになった。集落は人口約200、40戸から成り、全部が民宿を兼業しているから民宿は40軒、他に中・小学校・保育園の職員の世帯が13という。テングサ採りの海女さんが昔は朝鮮から来島していたと意外な話もあった。

窓にあった空中写真は2500分の1位のカラー写真地図で、ディテールがよく出ている上に、沖合いまで含めて細かい地名が加刷されている。島の平面は尾を北西に向けた魚のエイの形で五角形とも云えよう。最高所は33.5m、周囲に崖をめぐらした段丘島は上段の平坦地が面積の殆どを占め、そのすべてが畑地と云ってよく、防風用の垣根で区画されている。名物の初島タクアンの原料となる大根やジャガイモを主な作物とするが、1戸あたり0.3haほどの農地故に、園芸的に経営されている。対岸の伊豆山温泉背後の七尾のタクアン漬も80年ほど前から旅館との特約で始まっているから、初島タクアンもこれと似た様な考えで始められたものである。とも角、土産としてタクアンを買い、くだんの空中写真も別に何枚もあるからと言われるままに戴いてしまった。

港に近い処にある漁協の事務所が熱海市初島地区の事務所も兼ねていて、たまたま1人おられた職員にお願いして、如何にも自前でつくつたようなパンフレット「初島の概要」を手に入れることができた。それには「天保元年(1830年)、戸数41戸、その後増減なく現在に致る。」とさり気なく記されている。1985年12月末の統計資料によると初島の人口は189人、60世帯とある。人口は漸減している様だが、教員や診療所などの世帯を除けば、こゝ200年ばかりの間の戸数は変化していない。この戸数固定化の現象はつとに学界の注目を浴び、島嶼社会研究会の1951年の調査によって次のような結論を得ている。「増加の抑制は均分収益の細分化を防ぎ、減少の抑制は共同漁業の労働力確保のためである。」(浅野芳正：伊豆初島、しま9巻2号、1963年) 18世紀末以来、カツオ網が導入され集落全戸による共同労働、共同経営がなされ暫くして戸数の固定が始まっ